

## 「原点に戻って」そして「再生」

劔物 修\*

第22回日本循環制御医学会が2001年5月11～12日徳島市において開催された。徳島大学医学部麻酔学講座大下修造教授が会長を務められた。

今回のテーマは「21世紀の循環制御－原点に戻って－」という魅力的なものであった。当時、徳島大学の教授であられた齋藤隆雄名誉会員が名古屋市で第1回を開催されたのが1980年6月3日である。第8回はISCVAとの合同開催で神戸市で齋藤先生が会長を務められた。しかし、不思議なことに「循環制御」発祥の地である徳島市での開催は今回が最初である。今回の参加者は170人で（ちなみに第1回の参加者は200人）この数年の学会に比較すると多くの出席があったことになる。この数にも原点に戻った感がある。第1回は日本麻酔学会の前日、今回は広島市でのショック学会と重なったという、それぞれ異なった条件下でのもので、比較する方がおかしいかも知れない。

今回のプログラムの中で、最も注目を浴びたのは2つの講演であろう。一つは国立循環器病センター研究所バイオサイエンス部の森崎降幸先生による特別講演「ゲノム機能の解明と心筋の発生分化：心筋の再生及び機能改善にむけて」であり、もう一つは山口大学医学部第一外科の濱野公一先生による教育講演「虚血臓器に対する自己骨髄細胞注入による血管新生治療法」である。共に循環器領域における再生医療に関する最先端の内容であり、まさしく21世紀の「循環制御」に即した講演であったと感銘を受けた。22年前に産声を上げた当時、再生医療、ヒトゲノムDNA配列などという言葉は想像だにされなかった。今は医学部入試の口答試問にも顔を出さずキーワードのひとつと

なっている再生医療やヒトゲノム、今後どの様な方向に進んで行くのかが楽しみでもある。

第23回の本学会は北里大学の外須美夫教授が横浜において開催の運びであるが、テーマは「再生」である。外先生によるとこの「再生」という言葉には、再生医療の意味はもちろんであるが、日本循環制御医学会の再生をも意味しているという。原点に戻った「循環制御」がどう再生されるのか、今から心躍らせている一人である。

循環制御の意図するところは「これまでの内科的循環器学や心臓血管外科学とは違った角度のダイナミックな視点から循環を見直したい」とする齋藤先生の「創刊のことば」に集約されている。本学会会則の第2章第3条には「本会の目的を体液循環の調節機構および体液循環の管理・制御などの領域をめぐる学際的研究を通して医学の進歩に貢献すること」とある。体液循環の管理・制御こそが循環制御の由来である。この循環制御という呼称に22年前には違和感を持っていた会員も、今は愛着を感じると言ってくれる。

余談だが、北大も大学院重点化により、多くの講座名が改名した。そんな中で「制御」という言葉の付く講座が目立っている。分子病態制御学、癌制御医学、遺伝子病制御学、侵襲制御医学などである。ご承知の様に麻酔、手術、痛み、外傷、ショックなどの生体に加えられる各種の侵襲を制御する学問体系が侵襲制御医学であり、臨床麻酔、ペインコントロール、集中治療そして救急医学をグローバルに包括する学問体系である。

「循環制御」という言葉が多くの会員に愛され、21世紀に入り、発祥の地で「原点に戻った」本学会が、2002年5月横浜での学会を契機に見事に「再生」されることを祈念してやまない。

\*北海道大学大学院医学研究科高次診断治療学専攻  
侵襲制御医学講座侵襲制御医学分野